
嵐を呼ぶC/W&Action

柳雨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

嵐を呼ぶC/W & Action

【Nコード】

N9432K

【作者名】

柳雨

【あらすじ】

風都の平和を日々守る探偵「左翔太郎 & am p ; フィリップ」ある日、埼玉県かすかべへ温泉旅行に行くことになった鳴海探偵事務所一同+照井竜一行。これが後に『嵐を呼ぶ五歳児』との出会いになるとは、この時の彼らはまだ気づきすらなかった…

前編・嵐を呼ぶC/Wのかすかべ温泉旅行珍道中！ - (前書き)

どうも皆様、作者の柳雨という者です

本作は仮面ライダーWとクレヨンしんちゃんのコラボ&amp;短期連載小説です

注意点は…

連載はスローペースになるかもしれないことと

本家『クレしん』ばりにお下品(要は下ネタ)要素とキャラ崩壊なギャグ要素があることの二つです

そういう展開が苦手な方や純粋なWファンの皆様はご注意ください
さい…

前編・嵐を呼ぶC/Wのかすかべ温泉旅行珍道中！・

・埼玉県・かすかべ。

「ここがかすかべ…なるほど、中々にぎやかな良いところじゃないか。」

・帽子をトレードマークにしたスーツ姿の青年…彼の名は左翔太郎、風車が回るエコの街・『風都』出身の探偵であり、『もう一つの顔』も持ち合わせている…。

「いやっほー！！私、大阪や風都以外行ったことないから楽しみにしてたんだよね。」

・やたらハイテンション過ぎなパツと見に中学生くらいの女性…自称『鳴海探偵事務所所長』鳴海亜樹子がはしゃぎまくるが彼女以上にハイテンションな者が…。

「翔太郎！亜樹ちゃん！こんなところでボサツとしてないで早く『例の場所』に行こうじゃないかッ！！」

「いや落ち着けよ、フィリップ！！お前、亜樹子よりもはりきり過ぎだろう！？」

・ピンで纏めた奇抜な髪型に個性的なファッションに身を包んだ翔太郎の頼れる（？）相棒パートナーの少年・フィリップは傍目から見たら不審者扱いされかねない程にハイテンションだった。

「…で？何故オレまでこんなところに来なければならなんだアッ

「!!」

「『ガーツ!!』と怒鳴り散らす、真紅を基調にしたライダースーツに身を包んだ不機嫌顔な風都署の『超常犯罪捜査課』刑事の青年・照井竜は翔太郎達にキレまくった。

「お前も落ち着けッ!!」

「離せ! 大体誘ってきたのはフィリップだろ!? しかも理由も明かさず無理矢理!!」

「憤慨しながらフィリップを指差して暴れる照井を翔太郎は背後からはがいじめし、抑える。

「僕に質問をするな。」

「人のセリフを勝手に使うなアアアアアアッ!!」

「お前ら、いい加減にしろオオオオオ!!」

「自分の口癖^{セリフ}を盗った泥棒さん(フィリップ)と、今にも彼を殴りかねない勢いの照井の言い争いに耐え切れず、翔太郎は絶叫した。

「さて、本来ならば風都にいるはずの彼ら四人が何故かすかべに行くことになったか?

「今から約三時間程前…」

「よっしゃ! 次こそ一等…当ててやるわよ!!」

- 買い物をしていた亜樹子が帰りに福引きをしていたのだ…ちなみにやる前に三枚程あった福引き券はついさっき二回外してしまっているため、事実上、これがラストチャンスだ。

「…つと、こんな時こそ！」

- 亜樹子とはある場所のある人物に携帯で連絡を入れた。

- 鳴海探偵事務所。

「はい、もしもし？ああ…亜樹子か、どうしたんだ？」

- 翔太郎は突然連絡を入れた亜樹子からの電話をクワガタ型の携帯『スタッグフォン』で聞いていた。

『今すぐフィリップ君に代わってちょうだい！ハリー！ハリー！ハリー！』

「うるせえよ！！解ったから声のボリュームを下げろ！！おい、フィリップ！亜樹子がお前に代わってよ！！」

「なんだい？翔太郎…僕は今、『絵本』について『検索』中なんだが…？」

- フィリップの言う『検索』とは、彼自身が『地球の本棚』という地球上のあらゆる記憶を納めた精神世界にアクセス出来る特殊能力である。

- フィリップが一度興味を持ったものは自分で全てを知り尽くして納得するまで一切融通が利かないという悪癖もあるが、その分、翔

太郎や照井の『仕事』に役立ち、助かってる。

・そして現在、フィリップは何故か山積みになってる幼児向けのお話などの絵本の束を読みまくっていた。

「しかし、まあいいか…何やら急ぎの用事みたいだし。」

(ホッ…。)

・最近ではゴリ押しすれば渋々ながら中断してくれるので翔太郎達は内心違う意味でも助かってる。

「代わるからスタッグフォンよこして、あと翔太郎、暇ならこれ読む？」

「おいおい…ハードボイルドなオレにそんな軟弱^{ヤワ}な絵本…って、何イ!?!」

・スタッグフォンをフィリップが取り、代わりに自分が読書中だった絵本を翔太郎に渡した際…絵本に『よいこのえほん-夜の銀ぎつね 暗黒街に行く-』と、嫌なタイトルが書かれていたので翔太郎は驚いた。

「そんなの読みたくなえよ…本当にがきんちよ向けか？」

「じゃ、これは？」

・フィリップが次に進めてきたのは『ジャガイモ太郎 一代記』という全800ページにも及ぶ大長編の分厚い絵本だった。

「読めるかアアッ！！全部読み終わるのに何年掛かるんだ！？」

「文句ばかりだなキミは…じゃあ、はい、これ。」

・次にフィリップが手渡してきたのは『ケツの穴太郎 対 玉袋さ
おの助』というタイトルの…絵本というよりも、もはや単なる下ネ
タだった。

「まともな絵本持って無エのか、おのれはッ！？」

「…会話中だから静かにしてくれないかい。」

「…わーったよ。」

・冷めた目線でフィリップに睨まれたため、翔太郎は観念した様な
顔で絵本の山から『おかま太郎』という絵本を取って朗読し始めた。

「お…おかま太郎は、ブラのホックが胸毛に挟まり…激痛のあまり、
床に倒れてしまいました…ふむふむ…大変だな、こりや。」

「もしもし？ああ、ごめん亜樹ちゃん…翔太郎がうるさくてね…。」

『うつん、いつものことだし、気にしてないから、それよりも福引
きの当たり方が知りたいんだけど…検索お願い出来る？』

・そう…亜樹子の頼みとは福引きで一等を取る方法だった。

「解った、では検索を開始しよう…キーワードは『福引き』…『形
式』…『確率』…。」

・早速『地球の本棚』に入り込み、フィリップはあれこれキーワードを入れて本棚の数を減らし、無数あった本棚が最終的には一冊の本だけになった。

「ヒットしたよ…亜樹ちゃん、福引きの一等を確実に当てる方法が解った。」

『本当！！それでその方法って！？』

・スタッグフォンでキャツキヤと喜ぶ亜樹子…だが次の瞬間…フィリップは信じられない言葉を口にした…。

「鼻の穴に割り箸を突っ込み、秋刀魚を両手に持ち、大根を股に挟んで、ヒゲダンスを踊りながら…『プリティ リリカル マジカル パワーで いざッ！ パラリラ パラリラ わたしをお願い 叶えてラプリン！ 劇画タッチで メイドさんにな〜れ〜』と唱えながらメイドさんに変身した後、福引きのカラカラ回す奴を右に二回、左に四回、Aボタンを一回、Bボタンを三回押して、そしてセレクトボタンとスタートボタンを同時押しで裏技完了だ。」

『「ブッー！！？」」』

・フィリップのあまりにもブッ飛んだ検索の『解答』に亜樹子は勿論、朗読中の翔太郎も噴き出した。

『そんな恥ずかしい真似…出来るわけないじゃろがい！！』

「どうしたフィリップッ！？絵本の読み過ぎで思考回路ショート寸前までブッ飛んじまったか！！」

「1＋1＝2、僕の思考は至って正常だし、今まで僕が検索の答えを間違ったことがあるかい？」

・電話の向こうでギャーギャー騒ぐ亜樹子と彼を心配する翔太郎の意など全く介さず、涼しい顔で平然とするフィリップの表情は自信に満ちていた。

『あーもう、やりや良いんでしょ！？やりや！プリティ リリカル マジカルパワーで いざッ！ パラリラ パラリラ 私のお願い 叶えてラブリン♪ 劇画タッチでメイドさんにな〜れ〜♪』

「なんでやるんだよ！？これで外れたら…お前、もう風都で生きてけないぞ…！」

・亜樹子は電話の向こう側でフィリップに言われたことを全てやってのけた。

・そして…。

『お、おめでと〜ございます…金の玉…一等賞品の…かすかべ温泉旅行券です…』

『「…あれ？」』

・スタッグフォンから聞こえる福引きの人の『そんなヴァカな…！』な言葉が漏れた。

「嘘だろ…？」

・まさかあんなので一等温泉旅行が当たるとは…頭を押さえながら

翔太郎は絶句した。

『いよっしゃあああああ！！当たった！当たったアアアア！
一等温泉旅行！金の玉！キ。タマよ！！キ。タマが当たったわアア
アアアアアッ！！フィリップ君ありがとオオオオオ！うひゃっ
ほーいッ！！キ。タマー！！』

「亜樹子オオオオオッ！！年頃の女がそんな言葉連呼すんなアア
アアア！！」

・周囲の可哀相な人を見る様な視線も気にせず、鼻に割り箸、両手
に秋刀魚、股に大根を挟み、劇画タッチなメイドさんになって『キ
。タマ！キ。タマ！』叫ぶ亜樹子はスタッグフォンで声を聞いている
はずのフィリップと翔太郎に一等賞を当てた喜びを報告した。

・ちなみに余談だが…白い帽子を被り、白いマフラーをなびかせた
鋼鉄の髑髏の仮面を纏った亜樹子の背後霊が『あ、亜樹子…オレが
死んだばかりに…可哀相に…うう…』と呟いたそうだ…。

・一方。

「『温泉』…なんだい？それは…興味が湧いてきたじゃないか！フ
フフ…。」

（しまった…フィリップの頭に新しい検索ワードが入った！！）

・亜樹子のさつきのキ。タマ発言の中にあつた『温泉』をフィリップ
は見逃さなかった…こうなると長年の付き合いである翔太郎でも
フィリップを止められない。

「もしもし…亜樹ちゃん？券は何人分？ふむふむ…四人分か…じゃあ照井竜もついでに誘ってしまおう、出発？今から。」

「今ッ！！？待てフィリップ…！！」

「気づいた時には既に遅かった…フィリップはいつの間にかいなくなり…。」

「おい！？何をする…離せ！フィリップ！！オレはまだ仕事だ！！」

「今すぐ有給休暇に切り換えればいいじゃないか…フフフ。」

（マジで照井を確保してきやがったアツ！？）

「- 仕事中の照井を無理矢理確保、その後、暴走したフィリップの勢いを止められず…翔太郎と亜樹子は今すぐかすかべレッツゴーした。」

「- 話は冒頭に戻り、現在…。」

「- 知ってるかい？翔太郎…草津に別府…日本各地の温泉は色んな効能を持つてて滋養によく効いてだね…。」

「- そのノリでよく保つな…お前…。」

「- はりきりまくりなフィリップのテンションについてけず、半ば疲れ気味の翔太郎だった。」

「- おい、左…券にあった温泉旅館ってアレじゃないか？」

「意外と立ち直り早いな…ん？」

・最初こそは嫌々来たが、諦めて立ち直った照井が指差した温泉旅館を見て…。

「おお…これは、凄いな…！でかした亜樹子！フィリップ！」

「アタシに感謝しなさい！えへん！！」

「僕にもね。」

・調子に乗る亜樹子とフィリップだが、翔太郎は今回ばかりは文句無しで喜んだ。

・照井が指差した旅館…それは見るも豪華な最高級プリンスホテルだったからだ。

・だが…次の照井の発言で翔太郎は喜びの絶頂からドン底に叩き落とされた。

「いや…その『隣り』の奴だ。」

「……はい？」

・プリンスホテル…の、隣りにある今にも崩れだしてしまいそうなボロい、荒廃し切った旅館だった。

「なんじゃ、ありゃあああああッ！？このバカがー！！」

「痛ッ！」

「アタシのスリッパ、勝手に…あいたー!?」

「なんでオレまで!？」

・大絶叫しながら翔太郎は亜樹子のスリッパを盗って、フィリップ、亜樹子、ついでに照井をド突いたという…。

・そして…。

「照井竜、なんて読むんだい?この旅館の名前。」

「…『^{ゴーストタウン}誤悪酢吐汰雲旅館』と、読みたいだな…。」

・フィリップが尋ね、照井が読み上げた…あまりにも不吉過ぎる旅館名に亜樹子は青ざめ、翔太郎は青筋を立ててワナワナ震えている。

「鬼。郎か、ぬゝ。先生呼んでこい…!」

「あ、懐かしい…けど落ち着いて翔太郎君!!」

・某妖怪や悪霊のスペシャリスト達の名前を言う翔太郎を慌てて止める亜樹子、それを見ながら『やれやれ』といった様子で溜め息を吐く照井とフィリップだった…。

・そこへ。

「えー…こんなボロツちい旅館…オラ、嫌だゾ!」

「仕方ないでしょ！旅行券に書いてあったの、ここなんだから！！」

「まー…いいじゃないか…。」

「たや！」

・五歳くらいのジャガイモ頭におかず海苔眉毛の幼児とその母親、父親、そして赤ちゃんの四人連れが誤悪酢吐汰雲旅館に入ろうとしていたのだ。

（（（こんなところ…他に福引きで当てた人達いたんだな…。）（）（）

・翔太郎・亜樹子・照井は取り敢えず自分達以外にこんなボロ旅館に泊まってくれたため、他に仲間が出来たみたいで安心した。

・それはちょうどコンビニや本屋で立ち読みしようと思った際に他の人が先にやってると安心する…という心情に似ていた。

・そう思っていると…幼児のリュックから絵本が落ちた。

「キミ、落ちたよ…って、これは！？すまないがちょっと見せてくれ！」

「ああーん！何するのッ！？」

「おい！？フィリップ！何してんだ！！」

「ちょっとあなた！家の子のものを勝手に！！」

・フィリップは皆が止めるのを構わず絵本をやや興奮気味に読み始

める。

「…素晴らしい…僕が今日読んだ中で一番の傑作だ！！『ぶりぶりざえもん』か…実に興味深い！」

「おお！お兄さん解る？」

「解る解る！良いねえ…この独創的なキャラとストーリー…ゾクゾクするよ！！」

「……え？」「……」

・何故かフィリップは『ぶりぶりざえもん』なる薄紫のタイツを履いて腰に刀（？）を差した変なブタが描かれてる手描き絵本を気に入ってしまい、幼児は大変喜んでいた…展開についていけない二人以外の人間は全員ポカンとしている。

「いや〜それほどでも」。

「キミ、タダ者じゃないね？僕はフィリップ…キミは？」

・フィリップが名乗ると幼児は照れながらこう名乗った。

「オラ、野原しんのすけ、五歳！ふたば幼稚園ひまわり組でぶりぶりざえもんの作者、好きなものはクレイなおねいさんとアクション仮面、嫌いなものはピーマンだゾー！！」

・本来ならば決して出会うことがない風都を守る探偵達と嵐を呼ぶ幼稚園児が出会った瞬間だった。

前編・嵐を呼ぶC/Wのかすかべ温泉旅行珍道中！ - (後書き)

前編：いきなりやってしまいました、下ネタや変なギャグ連発な上にフィリップと亜樹子がエライことになりました（ファンの皆様まことに申し訳ありません…）

ちなみに途中で現われた亜樹子の背後霊は無論：おやっさんこと鳴海壮吉（スカルの姿）です（苦笑）

個人的にフィリップとしんのすけは気が合いそうなイメージがしたため、彼ら二人からファーストコンタクトさせました

今回は顔合わせ程度で終わりましたが、次回の中編から『事件』が勃発しますので、お楽しみに、柳雨でした！

中編・嵐を呼ぶC/Wの戦湯・Aの熱闘 - (前書き)

ついに運命的な出会いを果たした探偵達と嵐を呼ぶ五歳児、彼らの
出会いは一体何を意味し、旅館で何が待つか…？

本作を閲覧の皆様は是非、亜樹子みたいなスリッパ持参で御覧にな
ってください！（嘘）

中編・嵐を呼ぶC/Wの戦湯・Aの熱闘・

「ほうほう、フィリップお兄さん達、たんでーさんは『とーふ』での福引きに当たって、温泉に來たのかゝなるほど。」

「一部例外もいるけどそういうことになるね、…キミ達もそのクチで來たみたいだね、しんのすけ君。」

「おいおい…そいつの名前はフィリップじゃなくて『フィリップ』な、あと豆腐じゃなくて『風都』から來たんだよ。」

・フィリップがしんのすけのぶりぶりざえもんの絵本を拾って、その場で読んだ後、フィリップは何故か大絶賛…現在では波長が合ったかの様に仲良くお話し中である。

・翔太郎達と野原一家はあの後、軽く自己紹介を済ませて、旅館前で色々と世間話などに花を咲かせていた。

・尚、しんのすけは盛大に名前を言い間違えてるが、フィリップ本人にはさほど問題ではないらしい。

「おい！！左ッ！この赤ん坊なんとかしてくれッ！！」

「ウキヤー！たややーい！」

「こ、こら！ひまわり！！照井さんに引っ付かないの！！ごめんなさい、この子、美男子に弱くて…。」

「どういう赤ん坊だよ…一体。」

・照井は、美男子好きな赤ん坊「野原ひまわりに懷かれ、さっきから背中にくっつかれて離れず、しんのすけとひまわりの母親」野原みさえが引き剥がそうとしていたが上手くない…。

「…。」

・しんのすけ・ひまわりの父「野原ひろしと翔太郎はふと、お互いを見合わせてこう呟いた…。

「…大変そうっスね、お宅も…。」

「お互い苦勞しそうだね…はは…。」

・似た様なポジション故に苦笑しつつ、何気に意気投合していた。

「はい！野原さん達とこうしてお知り合いになったことだし…早速旅館入っちゃって温泉楽しむわよー！！」

「あ！おい…亜樹…子…。」

・翔太郎はノリノリで旅館に一人入ってく亜樹子を止めようとした時だった…。

「よ…こそ…我が、ゴーストタウン誤悪酢吐汰雲旅館へ…イーヒッヒッヒッ！！」

「…うっぎゃあああああ！？」

「…うおおおおおおッ！？」

・突然、見るからに廃墟に住み着いていそうな…白目むいて、ガリガリに痩せこけた、悪霊じみた不気味な顔にスダレハゲの小男が旅館入口に現われたため…翔太郎と亜樹子、みさえとひろしが思いっきり悲鳴を上げた。

「ほ、本物の幽霊見ちゃったゾ…！」

「ば、バカを言つな…そんなものがある訳が…！！」

「なるほど…これが幽霊の実物か…実際見るとかなりゾクゾクするねえ。」

・しんのすけと照井は珍しく震え上がり、逆にフィリップは恐れもクソも無く興味津津である。

「いえいえ、違いますよ…コホン、改めてようこそ、誤悪酢吐汰雲旅館へ…私はここのオーナーのコキーナといいます。」

「そ…そうか、驚いたりして悪かったな…。」

・コキーナと名乗った旅館のオーナーは慌てて自分が人間であることを言い出すので、翔太郎は申し訳なさそうに謝る。

「えー、鳴海探偵事務所様＋α御一行に野原様御一行でいらっしやいますね？遠くから本当にご苦労様でした、今から御部屋にご案内致しますので、ささ！どうぞ御上がりください。」

（お、思ったよりも悪い人じゃなさそうね…。）

・コキーナは外見こそ不気味ながらも人柄や客を迎え入れる誠実さは良いため亜樹子は警戒心を解いた。

「待て！『+α』ってオレのことか！？無理矢理連れて来て、何だこの扱い！！」

「キミ以外に誰がいるんだい？」

「貴様ア！！」

（照井、挫けるなよ…。）

・照井は自分がオマケ扱いされた気分になり、怒りをあらわにしてフィリップに掴み掛かる…普段は照井とあまり気が合わない翔太郎でも今回ばかりは同情した…そんな時だった。

「に…兄ちゃん、美味そうな…お、『お肉』、取ってきたよ…。」

「……。」「……」

・ホラー第二弾が現われた。

・アフロヘアで、顔には何かの皮膚で作ったレザーマスクを被り、何故か包丁を片手に、可愛らしいヒヨコがプリントされた血塗れエプロンを着た屈強な大男が、館内の奥からノシノシ歩いてコキーナに話しかけてきたのだ。

「……ギヤアアアア！！殺人鬼ーッ！！？」「……」

「こら、フーパー！！お前は顔を出すなど言っただろ！？」

「痛い！…ごめんよ、兄ちゃん…。」

・一同大絶叫、特に亜樹子は軽く泣き出した…コキーナはフーパーという名前の殺人鬼風大男を怒鳴りながら尻を蹴っ飛ばして追い払った。

「すいませんね、私の弟がご迷惑を…。」

「弟！？な…なんで殺人鬼みたいな格好してたんだッ！！」

「というかあのエプロンの血と『お肉』って、なんだ！？場合によつては逮捕するぞ！！」

「弟は料理番でしてね、夕飯に美味しい猪鍋を準備してたところです。」

「エプロンの返り血って猪の血！？」

（あれが本物の殺人鬼…『ドーパント』と戦わせたらどっちが強いかな？）

・翔太郎と照井はフーパーのことをコキーナに尋ねたがどうやら害のある奴ではないらしい…尚、フィリップは怪人『ドーパント』を包丁でメッタ刺しするフーパーのイメージを頭に浮かべていた。

・そんなこんなな騒動があつたが、鳴海探偵事務所＋α一行と野原一家は今日泊まる部屋へ案内されることになった…。

「どうぞ…こちらのお部屋となります。」

「こういう旅館の部屋は『菊の間』とか『梅の間』とか、そういう名前が定番なのよね。」

「おー、あるある!」

「えー、オラはどちらかというと『ラベンダーの間』がいいゾ。」

「「無い無い…。」」

「旅館の定番の一つ『』の間』に関する話題を野原一家でしていたが…。」

「はい、こちらが野原様御一行の御部屋となります……………」
『ザクロの石榴の間』でございます。」

「「「「ちよつと待てイッ!」」」」」

「お?」

「ん?」

「しんのすけとフィリップ以外の全員がツツコミを入れた。」

「何故ならば部屋の入口付近の掛け軸に、バツクリと生々しく割れて赤い血の様な汁が垂れてるザクロの絵などというグロいものがあったからだ。」

「そして鳴海探偵事務所+α様御一行はこちらの……………」
『ケシの芥子の間』
となっております。」

「ふざけるなアアアアッ!!」

「なんで探偵や刑事がわざわざ犯罪の匂いがしそうな部屋に泊まんなきゃいけないんだよ!？」

「まさか本物があるんじゃないかな?」

・探偵や刑事故に、犯罪を特に許せない人種である亜樹子・翔太郎・照井の順で一斉にツッコんだ。

・何故ならば、部屋の入口付近の掛け軸に麻薬の精製に使われるケシの花と粉末になったものの絵が生々しく描かれていたからだ。

「いや〜中々奇抜な部屋だね、実に興味深い…それに絵にかなりの年季が感じられるねえ、しんのすけ君。」

「いや〜中々に風流ですな〜フィリップお兄さん。」

「……どこがだッ!？」

・ちなみにフィリップとしんのすけは何故か妙に気に入ってしまったという。

「…まったく、こんな旅館、オレ達以外に来る奴なんているのかよ？」

「…同感だね。」

・渋々各自の部屋に入ろうとしていた翔太郎とひろし…まるで地獄に來た様な気分であつたが。

「あれ？もしかしてしんちゃんのパパさんじゃないですか？」

・地獄に『女神』がやって来た。

「あれ？ななちゃんツ！？おい、しんのすけ、ななこお姉さんが来てたぞー！」

「なにぬねの！？ほっほーい！ななこおねいさーん！！」

「やっぱりしんちゃん達だったんだ、そちらの人達は？」

・しんのすけは興奮しながら、憧れている女子大生・大原ななこに飛びついた。

「なんてこったい…地獄に仏、いや、女神とはまさにこのこと…フフフ。」

・ななこを見た瞬間、翔太郎の頭上に光が差したかの様に希望が沸いた…そしてクールに、ハードボイルドに自己紹介をした。

「どうも…オレの名は左翔太郎、どんな事件でもハードボイルドに解決する風都一の名探偵、そしてこいつらは助手その1、その2、+αです。」

「その1…僕かい？フィリップです。」

「誰がその2やねん！どーも、鳴海亜樹子です！」

「また+α扱いかッ！？…照井竜だ。」

「はじめまして、大原ななといいます…そしてもう一人…。」

・翔太郎の下心丸出しな自己紹介と、オマケ扱いされた他三人がななに軽く名乗ると同時に、ななこの背後から…。

「押忍！！アタシななこの友達で女子プロレス研究会所属の神田鳥忍でーす♪えへ♪」

（（バ…バケモンだアアアアアア！））

・女とは到底思えないイカつい風貌の巨大なゴリラ女・神田鳥忍を見てフィリップ以外の三人はそう思った…。

「あーら！？やだん！イイ男ばかりじゃない！アタシ嬉しいわー！！」

（…マズい。）

・こればかりはさすがのフィリップも身の危険を感じ…。

「さて、しんちゃん…これからぶりぶりざえもんの続きを二人で考えないかい？」

「そ、そうですね…。」

「さ、さて…ひまわり…ちゃんだな…オレが面倒見よう。」

「うきやきや！たいや〜」

- 急にフィリップはわざとらしく、照井はよそよそしくそれぞれの相方（？）と一緒に部屋に入ってしまった…。

「ちょっとヤワっぱいけど、翔太郎君ってアタシ好み！！ウッフン！」

「アイツら、急にどうした…か、神田鳥さん…？ちょ…やめ…アッ
ー！！」

「翔太郎君ー！！」

- …男性陣で残った翔太郎が忍ゴリラのへの犠牲いけにえとなり、ななこと忍の部屋『彼岸花の間』へと『お持ち帰り』されてしまった。

- ちなみに後に、部屋から出て来た、着衣が所々破れたり、乱れたりして体も心もボロボロになった翔太郎は『さすが女子プロレスラー希望、なんてテクニク…もうオレ、お嫁にいけない…。』と泣きながら語った…。

- 翔太郎にとって一番の地獄は旅館ではなく、忍に『禁則事項プロレス』されたことだという。

- 一同は色々な意味で疲れたため、名物の温泉に入ることにした。

- 尚、照井は後でゆっくり入りたいため、今は一人、部屋でくつろいでいたという。

- 男湯。

「…もうツツコミ切れない…。」

・翔太郎とひろしは露天風呂を見て唾然とした…。

・何故かお湯の色が毒々しい『紫色』だったり、異臭がしたり、明らかに人間の頭蓋骨がいくつか転がっていたからだ。

「何この色！？有り得ないんだけど！！ド。クエの毒の沼！？…つてか匂いキツイ！！硫黄か、これ！？」

「あの頭蓋骨…一体誰のだ…？」

・なんて話してると。

「ふー…イイ湯加減だゾ、父ちゃん、翔太郎おじさん。」

「見なよ翔太郎、一発芸・スカル！」

・平然と入るしんのすけと、頭蓋骨に翔太郎の帽子を乗つけて遊ぶフィリップがいた。

「しんのすけ！？入るんな温泉！！」

「フィリップッ！不謹慎なネタで遊ぶなアアアア！！あと何オレの帽子使ってるの！？」

・翔太郎とひろしは目茶苦茶怒った。

・ちなみにしんのすけの頭にはデカいタンコブが出来ている…これはななこと一緒に女湯に入ろうとしたため、みさえにゲンコツを食らい、亜樹子にスリッパでド突かれたためである。

・また、ななこは風邪気味で入れなかった、しんのすけは些かブル
ーになったがもう立ち直った様だ。

・なんやかんやで楽しんでた時。

「NAUTINLUS！」

『良き湯かな』

「……」

・突如、洪く甲高い電子音が聞こえてきた、そして翔太郎達が入っ
てるのは別の、奥の方の温泉に何故かアンモナイトもどきがいた。

・正確にはアンモナイトを無理矢理人間にしたような不気味な化物
が温泉に気持ち良さそうに浸っていた。

「か…怪物！？」

「な…なんでドーパントがいるんだよーッ！？」

「これは計算外だね…。」

・ドーパント…地球のあらゆる『記憶』を宿したUSBメモリ型の
アイテム『ガイアメモリ』を人間が使用し、変身した怪人。

・それが何故、わざわざ変身しながら湯を嗜んでるかは全く意味不
明だった。

『なんだよ、お風呂好きなドーパントがいて悪いか！？』

「悪いわアッ！！」

- 翔太郎はアンモナイトもどきに怒鳴る。

「翔太郎、『変身』だ！」

「なんで風呂にドライバーとメモリ持ってきてんだよ！でもでかした相棒！！」

- 翔太郎はフィリップからメモリとWドライバーを受け取り、腰に装着、フィリップも同様だ。

- 翔太郎は左スロットに黒で『J』と書かれたメモリ、フィリップは右スロットに緑で『C』と書かれたメモリを装填。

「JOKER！」

「CYCLONE！」

「変身！！」

「CYCLONE/JOKER！！」

「なんだ！？」

「いや〜ん！」

- 電子音と共に翔太郎の周囲に激しい乱気流が巻き起こり、体に装

甲が張りつき、Wを象ったアンテナ、赤い眼、黒い左半身、銀色のマフラーがついた緑の右半身といった奇抜な姿の…風都を守る仮面ライダーW。サイクロンジョーカーとなった。

そして同時に突然フィリップが倒れ込んで湯船の底に沈んだり、乱気流にあおられてしんのすけの腰のタオルがヒラヒラしてぞうさんが見え隠れした。

『さあ…お前の罪を数えろ!!』

『罪も何も温泉楽しんでただけだーッ!!』

いつものキメ台詞を言い放ち、Wはドーパントと対峙する。

尚、今のWの頭には手ぬぐいが乗っかり、腰にはタオルを巻いていた。

「わーい！わーい！アクション仮面だゾー!!」

『違うわ!!おいフィリップ…あのアンモナイトみたいな奴は何だ?』

翔太郎の意志がしんのすけにツツコミ、フィリップの意志に尋ねた。

『よく似てるがあれはアンモナイトじゃない…南太平洋からオーストラリア近海の深海に、今も尚現存する「生きた化石」と呼ばれるオウムガイという貝…「ノーチラスメモリ」を使ってるね。』

アンモナイトもどき…否、ノーチラス・ドーパントの詳細をフィ

リップのが翔太郎に伝える。

『クソツ！食らえ〜！！』

『あつぶなツ！？』

- ノーチラス・ドーパントは殻の隙間から無数の触手を伸ばしてWを串刺しにしようとしたが、Wは素早く身を翻して回避した。

『温泉で良い気分だったのに意味も無く邪魔しやがって！！』

『翔太郎…ドーパントが何か言ってるよ？』

『生意気だな。』

『しゃべっただけで生意気呼ばわり！？』

- 針の様に鋭い触手攻撃を繰り返しながら激怒するノーチラスの言いつ分にWはもの凄く理不尽な反論をした。

『素手じゃ不利か…。』

『翔太郎、ここはトリガーにメモリチェンジだ。』

『TRIGGER！』

『CYCLONE/TRIGGER！！』

- Wは左スロットのジョーカーメモリを引き抜いて代わりに青い『T』のメモリ…『銃撃手の記憶』^{トリガーメモリ}を装填、左半身が黒から青にハ―

フチェンジし、サイクロントリガーとなる。

「アクション仮面の色が変わったゾ？」

『だから違うつてーの！仮面ライダーWだ！！覚えておけ！！』

『しんのすけ君、危ないから下がってくれ。』

『うげああああ！？』

- Wはしんのすけを下がらせ、ハンドガン型の武器、トリガーマグナムから放たれる風の力を付与した銃弾でノーチラスを撃ちまくる。

『この野郎…ブシュウッ！！』

『ぐは！！？』

- ノーチラスはお返しに、温泉のお湯を吸い込んでWの顔に向かって水鉄砲の様に放った。

『くたばれ！！』

『しまった…眼が…ガハッ！！』

『ガアッ！？』

- お湯が眼に入ってしまった、そのはずみでトリガーマグナムを落としたWの隙についてノーチラスは凝縮した触手の槍で一方的に攻撃した。

「アクション仮面！オラが今お助けするゾー！」

「やめろ、しんのすけー！」

・ひろしが止めるのも利かず、しんのすけがWとノーチラスのところにいき…。

「けつだけ星人！潜水艦バージョンー！ぶりぶりー！ぶりぶりー！」

『何やってんだア！？』

『凄い…どれが本物なんだ？』

・風呂の中をけつだけ星人しながら高速で浮かんだり沈んだりを繰り返すというおバカ攪乱テクニクを披露…フィリップは何やら感心していた。

『クソ…バカにしゃがってー！』

・ノーチラスはモグラ叩きの要領でしんのすけを攻撃するが、回避があまりにも早過ぎて上手く当てられない。

『翔太郎…もしかして、チャンスじゃないかい？』

『フィリップ…オレもそう思った、いいぞ、しんのすけー！』

「JOKER！」

「CYCLONE/JOKER！！MAXIMUM-DRIVE！！」

- Wはこの隙にサイクロンジョーカーに戻り、必殺技を放った。

『ジョーカーエクストリーム!!!』

「アクション仮面が割れたゾー！」

『え？え？ええええ！？えびゅー!!』

- Wは宙に浮かび上がり、左右の体を真つ二つに割りながら、風の力を纏ったキック『ジョーカーエクストリーム』でノーチラスを爆砕した。

- 爆風が晴れると同時に、ドーパントだった男がグッタリ倒れ、手元にはメモリブレイクされたノーチラスメモリの残骸があった…。

『…つたく、とんだ温泉旅行だ…。』

「SPIDER！」

『フィリップ！！これはやり過ぎだろオオオオオオ！？』

- 戦い終わった後、Wはドーパント^{フィリップ}だった男をメモリガジェット・スパイダーシヨックのワイヤーで縛り上げ、全裸（フル○ン）のまま露天風呂にあった木の枝に吊るし、野晒しにした。

「あんた達は一切…。」

「アクション仮面だよ、父ちゃん。」

『Wだつての!!』

・翔太郎サイドのドーパント騒動はこうして終わった。

・その頃、照井は…。

「…やはり、オレも先に入れば良かったか…。」

・今さらながら照井は少し後悔しながら、夕飯まで中庭を散歩してた時だった…。

「きゃあああああああ!!」

「ななこー!!」

「…あの声は確か…!!」

・突如、同じく風呂に入らなかったななこの悲鳴、そして忍の声が聞こえた。

・照井は慌てて悲鳴がした辺りまで走ると…。

「貴っ様ア…！何をしているツ!？」

「!?!」

「あ…竜さあん!!」

・照井の目の前に気絶したななこを脇に抱えている端から見ても怪しさ爆発な覆面男、ソイツと対峙していた忍がいた。

「誰だ、お前は…その女を誘拐でもする気か？」

・照井は顔を険しくしながら、トスの利いた声で覆面に問う。

「違うな…オレは『ゆかい犯』だ！！」

「尚更悪いわ！！普通は誘拐だろ！そこは！？」

・照井は覆面のアホな返答に怒りがヒートアップした。

「アタシの友達返しなさいよ！そして誘拐するならアタシにしなさいよ！」

「そういう問題！？生憎ブスは扱っちゃいねえよッ！！」

・覆面は忍のアホな発言にキレながら、クリアブルーで『M』と書かれたメモリスティックを取り出し、覆面をめくってアゴの下のコネクタに挿入した。

「MEGA NEURA！」

「ガイアメモリだと！？」

・覆面は瞬時に、背中に四枚の薄い羽根を持つ大柄の、トンボに似たドーパントに変貌した。

『ブブブブ…ギシャアアア！！』

「あべし！！！」

・ドーパントは忍を殴り飛ばして、逃げようとする。

「させん！」

「B E E T L E！」

『ブギ！？』

・照井はガジェット・ビートルフォンを起動し、トンボもどきの逃亡を妨害した。

「よくやった、もしもし…左！ドーパントが出た、お前も来い…ああ、そうだ…良いな！」

・照井はビートルフォンを手元に戻して翔太郎達に連絡を入れた後、ベルトを腰に巻き、バイクのハンドルに似たツールをバックルに装着させた。

「A C C E L E E！」

・そして真紅で『A』と書かれたメモリを起動し、ハンドル…アクセルドライバーに装填し、エンジンをふかす様にハンドルを回しながら、叫んだ。

「…変ッ…身ッ…！！」

「A C C E L E E！」

・激しくエンジン音を轟かせ、紅い電流や熱を帯びたリング状のも

のが出現し、瞬時に照井の姿が変化。

・顔を覆う『A』を象ったフルフェイスメットの様な仮面に青いシルド、真紅の鎧やスーツ、そして手にはメカニカルな重剣を持った戦士となった。

『さあ…振り切るぜッ！』

『げえええええ！？』

・紅き『加速の記憶』を持つ仮面ライダーアクセルとなった照井は重剣『エンジンブレード』で、驚くトンボもどきに斬りかかった。

『うおおおおおおお！！』

『シギヤアッ！？』

・アクセルはエンジンブレードでトンボもどきをメッタ斬りにした上に。

『温泉宿にふさわしい攻撃をしてやる…！』

「ENGINE！STEAM！」

『熱…熱っちゃあああああ！？』

・エンジンブレードにエンジンメモリを挿入し、高熱の蒸気^{スチーム}を噴出させて、トンボもどきに吹っ掛けた。

『続けてマッサージもしてやろうか？とびきり痺れる奴だな！！』

「ENGINE! ELECTRIC!」

『あばばばばば!?!』

- 今度は電流エレクトリックに切り換えてトンボもどきを感電させた。

『ふむ…大して強くないな。』

『クソが…!』

- アクセルは倒れたトンボもどきを見下ろしながら呟いてると。

『おい! 照井!?!』

『大丈夫かい?』

『フン…遅いぞ。』

- ようやくWも駆けつけ、アクセルと合流した。

「お? アンタ誰?」

『照井竜だ…じゃなくて何故そのジャガイモ小僧もいるんだ!?! あと、せめてタオルくらい巻け!』

- 何故かしんのすけまでついて来てしまった…しかも全裸で。

『それがコイツ、電話の話聞いちゃったらしくて…。』

『オラのななこおねいさんをお助けしたいんだゾ!!』

『『誰の者でもありません。』』』

- ななこがピンチだと聞いて、いてもたってもいられずに、しんのすけもついて来た…欲望丸出しなしんのすけの言葉に三人は一斉にツッコんだ。

- …その時…。

『なんだ…この「煙」は?』

- 突然、W達の周囲を妖しいピンク色の煙が包み込む。

『ぐ…ぐああああ!!』

『照井!?!どうした!照井!!』

『いけない…多分煙を吸ったんだ!!』

- 煙を吸ってしまったアクセルが頭を押さえながらもがき苦しみ、絶叫を上げてしまった。

『あが…ああああああああ!!』

『照井!しっかりしろッ!!照井イイイイイイ!!』

- 果たして謎の煙を吸ったアクセル…照井、そしてドーパントに連れさらわれそうだなこの運命は…?

中編・嵐を呼ぶC/Wの戦湯・Aの熱闘 - (後書き)

中編：今回は色々やりたいネタを詰め込んだため長めになってしまったり、バトルが少ないのが反省点ネックですね：すみません

『芥子の間』なんて物騒な部屋は日本中の旅館全部探しても絶対ありません、そしてダメゼツタイ！！

翔太郎が神田烏忍に何されたか？皆様の御想像におまかせします（酷）

フィリップが恐ろしいことを：ノーチラスだった奴へのお仕置きはヒド過ぎた：

次回は変な煙を吸ってしまったアクセルが大変なことに：そして、ななこの運命は？戦いが中心になる予定です、後編をお楽しみに、柳雨でした！

後編・嵐を呼ぶC / Finish? - (前書き)

携帯が壊れるというアクシデントが起きてしまい、やり直すのに時間ばかりでしたがなんとか完成致しました！皆様まことに申し訳ありませんでした！！

『嵐を呼ぶC』 ついに完結！

後編・嵐を呼ぶC/Finish?・

『グアアアアアアッ!?!』

『照井イイイイイツ!?!』

・謎のピンクの煙を吸ってしまい、もがき苦しむアクセル…。

「今の声はなに…って、ドーパント!?!」

・アクセルの絶叫を聞いて慌てて駆けつけた亜樹子はトンボもどきを見て驚愕した。

・そして…。

『オ、オレの尻から全身銀色の婆さん達が次々とオオオオオ!!』

『『『思い切り幻覚見てるーッ!?!』』』

・意味不明な事を口走るアクセルを見て、驚くWと亜樹子。

『ハッ!?!この煙はまさか幻覚作用を引き起こ…ウアアアアアッ

「！！」

『フィリップ！！うがあああああ！！？』

「フィリップお兄さん！？」

「翔太郎君ーッ！！」

・Wの二人にも煙の作用が効いてきたのか、もがき苦しむ…。

『大変だ！亜樹子艦長ッ！！このままだと我々は木星の重力圏に巻き込まれてしまうッ！！』

「亜樹子艦長って何！？それに木星って君の意識はどこへ行ってるの！？」

・フィリップまでおかしいな幻覚を見始めてバタバタ騒ぎ出したため、亜樹子はスリッパでド突いてしまった…さらに翔太郎も。

『ウヒョー！この万華鏡、エロ過ぎッ！！乱れる My Hear
t！！』

「えへ〜…オラにも見せて〜ん！」

「オイイイイツ！！翔太郎君！！何とんでもないもの見えてるの
！？このスケベッ！！あとしんちゃん、君はダメッ！」

・…下を向いて何かを必死に覗こうとしている翔太郎とエロい万華
鏡を見たがるしんのすけ、亜樹子は問答無用でド突いた。

・バタバタ体を動かして慌てるフリリップ側、エロい幻覚を下向い
て必死に見る翔太郎側…今のWの動きは端から見てもかなり危ない
というか変だ。

・Wとアクセルが『あやしい世界』ストレンジワールドに迷い込んでいた時。

『ヒヤヒヤヒヤヒヤ…助かったぜ！！オラ、こっち来いや…それで
は諸君、サラダバー！違った、さらばだ！！』

「ギヤアアア！！アタシ聞いてない！？」

「あーっ！？待てー！！ななこおねいさんを返せ〜！！」

「しんちゃん！アタシはーッ！？」

・トンボもどきは亜樹子の首根っこを掴み、背中の羽根を広げて地

面を強く蹴り上げて跳躍…あつという間に何処かへと飛び去ってしまつ…しんのすけはななこ（亜樹子はともかく）をさらわれて大層憤慨した。

『…ようやく木星から脱出を…ハッ！？僕は今まで何を…って！翔太郎！亜樹ちゃんがいらないよ！』

『お嬢さん、もう少し脚を広げ…はうあ！？なんだって…！』

- ようやく幻覚（または妄想）の世界から脱出出来た二人は意識を取り戻し、亜樹子がさらわれた事に気づいた。

『仕方ないな…バットに追跡させよう。』

「BAT！」

- メモリガジェット・バットショットを起動させて宙に放ち…。

『銀色の婆さんがとめどなく尻から…。』

「METAL！」

「CYCLONE/METAL!!」

『正気に戻れッ!!』

『ぐはッ!?!』

- ジョーカーメモリを『M』と書かれた銀色の『闘士の記憶』が内

包されたメタルメモリに入れ替えて、サイクロンメタルとなったWは、未だに幻覚見てるアクセルを文字通り鉄拳で殴り、正気に戻した。

・その頃、場所は変わって旅館では…。

「本日のお夕食ができました…イヒヒヒヒ。」

「お、お、お肉…。」

「「ちよつと待て!?!」」

・部屋に戻ったひろしとみさえはコキーナとフーパーが出した『料理』を見て抗議した。

・なぜなら…それは丸々一匹、猪の丸焼きの頭に包丁が突き刺さつてるといふワイルド感が否めない料理だったからだ。

「猪って…鍋とかじゃなくて丸ごと素のまま!? 食えるかーッ!!」

「ではごゆっくり…ウケケケ…。」

「あー…待つてよ、にいちゃん…。」

・ひろしは食つてかかるが、コキーナとフーパーはスウ…と、消える様に部屋から出ていった。

「ね、ねえあなた? さっきあの人達、体、透けてなかった?」

「ま、まさか…ハハッ…よせよ? それより、どうする…これ?」

「…さあ？」

・ますます謎な存在である旅館の兄弟に背筋をヒヤヒヤさせながら、二人は猪をどうしようか頭を悩ませた。

・場面は再び、中庭のW・アクセル・しんのすけ達…。

『さて、場所は大体分かったがアシが必要だな…照井竜。』

『仕方ない、トオツ!!』

・アクセルはアクセルドライバーのハンドルを外してジャンプ、そして体を折り曲げて、人型からバイクに似た形態・バイクフォームに変形したのだ。

（相変わらず見事なトラン○フォー○ーぶりだな…。）

・尚、翔太郎はふと、バイクフォームのアクセルを見て、最近復活を果たしたり次回予告時のトークに定評のある某アニメを思い出しながら乗り込んだ。

「おお？カッコイイ！オラも乗る！オラも乗る！」

『『だが断る。』』』

「ンもお…おケチ。」

・子供の好奇心故にか、アクセルに乗りたがるしんのすけ、しかし危険なので当然ながら三人が許可するわけがなかった、非常に非情

だがアクセルはWを乗せてサッサと走り去ってしまった。

『翔太郎、照井竜、いいの？しんちゃんを置き去りにして…。』

『馬鹿言つな！今からドーパントのところに行くんだぞ？んな危険なところに連れていけるか！！』

『左の言う通りだ、子供を連れていけるわけがない。』

・走りながら翔太郎とアクセルはフィリップの意見に反対したが、
…。

「ほっほーい、半ケツフラダンス」。

『…って、何イイイイイツ！？』

・Wの後ろに聞こえるはずのない声が聞こえた…しんのすけが猛スピードで疾走するアクセルの上で半ケツ出してフラダンスなんてしていたのだ。

『バカヤロー！！しんのすけ！！なんでついて来た！？』

・落ちない様にしんのすけを抱えながら翔太郎は怒鳴った。

『おい、まさかあのなことやらを助けに行くつもりなのか？だつたら引き返せ！お前…。』

『まあ待ちたまえ。』

・アクセルもしんのすけに怒鳴ろうとしたが、フィリップに遮られ

る。

『これから行く場所はかなり危険だ…それでも君はどうしてもななこさんを助けに行きたいのかい？』

「オ、オラにとってななこおねいさんはこいび…大切な人だから！」

『おい、今とんでもないこと言おうとしただろ？』

『ふふ…君はやはり興味深いね、解ったよ…一緒に行こう。』

『『フィリップ！？』』

・アホなことも口走ったが、しんのすけの強い意志を感じ取ったフィリップはすんなりと許可した。

「おお〜フィリップお兄さん、ふともも〜。」

『それを言うなら太っ腹だろ…。』

『照井！そういう問題じゃねえから！！』

・そんなこんなでしんのすけはW一行に加わるのであった。

・一方。

「こんな扱い、アタシ聞いてない！」

『やかましい！』

・トンボもどきによってどこかの倉庫に連れ込まれ、縛り上げられたななこと亜樹子…ちなみに亜樹子は何故か亀甲縛りな上に、三角^{おう}木馬^{まさん}に乘せられていた、さながらSMショーだ。

「大体誘拐なんて上手くいくわけないでしょ！？この誘拐犯！」

『誘拐犯ではない、人身^{バイヤー}売買だ、ほれ…あそこを見る。』

「ヒッ!？」

・言われて見てみると向こうには亜樹子達と同じ様に連れ込まれて縛り上げられてる女性や裸のオッサンが大勢転がっていた。

「ちょっと！なんでオッサンとかもいるの!？」

『人身売買ってのは客の注文が細かくてな…顔やスタイルは勿論、性別、年齢、髪型、瞳の色、ホクロの位置、SかMかなどな!!』

「ホクロとSかMかは関係ないと思うけど!？」

『変態はこだわるんだよッ!!』

・…生々しいことを言うトンボもどきに亜樹子は悪寒しか感じられなかった。

『ようやく注文通りの女が手に入ったのに…邪魔しくさって!』

「ちょっと待って…バイオレンスは無しの方角で…」

・ななこを見ながら、爪を亜樹子に向けて睨む…。

・その時。

『『『うりゃあああああ!!』』』

「ななこおねいさん!」

『なんだ…ぐばッ!?』

「翔太郎くん!!みんな!!」

・アクセルが倉庫に突っ込んでトンボもどきを撥ね飛ばした。

『まさか旅館の酒蔵に逃げ込んだとはな…。』

・バットショットから送られた情報を元に追跡した結果、旅館の酒蔵に到着してしまったという。

『亜樹子!?!なんだその格好…M?』

「違うわよ!」

『いや…ビッ○なのだろう?』

「フィリップ君まで!?!」

・SMされてる亜樹子への感想は散々だった。

『貴様…さつきはよくも…!!』

『ヒイツ！？』

・アクセルは人型に戻り、トンボもどきを睨む。

「三人共！こいつ人身売買してるって！！」

『なんだと！？許せねえ！！』

・亜樹子話を聞いたり、他に縛り上げられてる人達を見て翔太郎は激怒した。

『なるほど…あのドーパントは「メガネウラ」か、古代に生息していたトンボで、地球上で確認されてる節足動物の中でも最大級のサイズだ…。』

・フィリップはトンボもどき改め、メガネウラ・ドーパントを説明。

『だが、メガネウラのメモリには僕達をおかしくさせたあの煙を出す能力はない…なるほど…そういうことか。』

「HEAT！」

「HEAT/METAL！！」

『おい、フィリップ！何勝手にメモリを…。』

『まあ見てなよ…。』

・サイクロンメモリを外して赤で『H』と書かれた『熱き記憶』のヒートメモリを挿入し、Wヒートメタルになったフィリップは懐か

「何故かパック詰め粉末…小麦粉を取り出し、破いてから投げる。

『ハアッ！！』

・バラ撒いた小麦粉を狙ってWは火炎弾を放ち、辺り一面爆発させる。

『ギャアアッ！？』

『粉塵爆発！？ん？何か現れ…。』

・爆風が晴れると同時に現れたものは、顔に三面あるガスマスク、背中にはボンベを装着した黒いボンテージスタイルの変態…否、メガネウラとは別のドーパントだった。

『何！？もう一人いたのか…！！』

『クソ！！』

『あわわ…まさかオレの舎弟が見つかるなんてー！！』

・メガネウラはいよいよ慌てふためき、ガスマスクのドーパントを心配そうに見る。

『多分メモリは「GASS」だろうね…あの時メガネウラと戦った最中に気体化でもして姿を隠し、僕らに幻覚ガスを吸わせたんだな…。』

『なるほど…ねえ？』

『よくもよくも…!』

・フィリップによる推理によって全てを暴露されたガス・ドールパン
トをバキバキ拳を鳴らしながら怨みの炎を燃やす翔太郎 & アクセル。

『さあ… お前達の罪を数えろ!』

『さあ… 振り切るぜツ!』

『チクシヨ―! こうなりやヤケだ!』

『まとめてブツ殺してやる!』

・Wとアクセルはキメ台詞を言い放つと同時に、メガネウラとガス
がヤケクソ気味で迫ってきた…そしてアクセルはガス、Wはメガネ
ウラと対峙・対決を始めた。

『貴様アアアア! よくもオレの尻を銀色の婆さんの巣窟にした
な!?!』

『ENGINE! JET!』

『な、なんのこっちゃ… みぎゃあああああつ!?!』

・アクセルは怒り混じりにエンジンブレードを操作し、紅い閃光の
矢を乱射し、ガスをメチャクチャ攻撃した。

『この野郎… 舐めるな!』

『何！？ゲホッ！ゴホッ！？』

- ガスの体が徐々に紫色の気体になり、アクセルを包み込む。

『今度は幻覚ガスじゃなくて毒ガスだ！死ね！！』

『がああああ！！』

- このままではアクセルは毒ガスが全身に回って死ぬ…しかし、ここで予想外なことが起きた。

- プ〜〜〜。

『…プー？？？』

- 突如、マヌケな音が響く…。

「いやーん…オナラ出ちゃった。」

『げえええッ！？ペッ！ペッ！！！』

- しんのすけの言葉…否、放屁発言を聞いてアクセルとガスは吐き気を催した。

『や、ヤバい！臭過ぎる！！屁が^{オレ}気体に混ざるーッ！？』

- 別な意味の毒ガスが自らの体に混ざるのを恐れ、慌ててガスは気体化を解除して人型の姿へと元に戻つ…。

『…あ。』

- 次の瞬間。

「ENGINE! MAXIMUM - DRIVE!!」

『死にさせ!!』

『や、や、やめ〜で〜! アッ!』

- エンジンブレードによる必殺技…紅で『A』の形を描く様に斬撃を放つ『ダイナミックエース』でガスを斬り捨て、爆発させたのだ。

『絶望がお前のゴールだ…!!』

- 倒した敵に送る言葉を言いながら倒れたドーパントだった男と碎けたガスメモリを一瞥し、アクセルはWのところへ行こうとしたが。

- …プ〜〜。

『屁はもういいわッ!!』

「ごめんください、ガスください…。」

- アクセルはまたしんのすけの屁を浴びてしまった。

- そしてW対メガネウラ・ドーパントは…。

『1のッ!』

『げはッ!? 野郎!』

『くっ！？』

・Wは棒状の武器・メタルシャフトでメガネウラをボカボカ叩きまくり、メガネウラは口から針を吹いて攻撃をする、かなりの接戦だった。

『食らえ！』

『ガフッ！？』

・メガネウラは背中中の羽根を広げ、空中を飛行、Wを上空から狙つての素早い急降下攻撃を仕掛けた。

『オラオラッ！ドンドンいくぜッ！！』

『あのトンボ野郎、調子に乗りやがって…！！』

『翔太郎、気持ちは解るが冷静になりたまえ…今、弱点を検索してる…。』

・メタルシャフトで高速で繰り出される急降下攻撃をガードしつつ、フィリップが弱点を検索、それまで耐え切っていた時。

（弱点が解った！今から僕のメモリを変える、そしてタイミングを見計らって攻撃だ。）

（よし…任せたぜ、相棒。）

・二人の話がまとまったところでWはヒートメモリを引き抜いて金

色の『L』と書かれたメモリを代わりに挿入。

「LUNA！」

「LUNA/METAL！」

・右半身が赤から金色に変わり、ヒートメタルからルナメタルへとハーフチェンジしたWはメタルシャフトを構えて空を舞うメガネウラを見据える…。

『色が変わった程度で何が出来る！？シャウツ！』

・一番高い場所にピタツと止まり、急降下攻撃に移ろうとした次の瞬間。

（今だ！翔太郎！！）

『…ッオルアアアアアアッ！！』

『な、なん…なんぷらぁッ！？』

・伸びた、メタルシャフトがまるでゴムの様に、にょろーん、と伸びて、Wに突っ込もうとしたメガネウラの顔面を鞭の要領で引つ叩いたのだ。

・フィリップが所持する中で最も謎に満ちた『幻想の記憶』ルナメモリの特性…武器や自身の身体をゴムのような伸縮性に優れた軟体物に変えて敵を攻撃・捕縛するという規格外なものなのだ。

『休む暇も逃がす暇も与えないぜ…！！』

『ギヤアアアッ!!』

・Wは鞭の如くメタルシャフトを振るってメガネウラをビシバシ叩く・叩く・叩く。

『女王様とお呼び!』

『フィリップ!? 何故に女王様!?!』

『女王様ッ!!!』

『…って、お前も呼ぶなよ! トンボ野郎!!!』

・何気にSMの女王様なノリでシバきまくるフィリップ、メガネウラが『女王様』とマジで呼んだため、翔太郎は嫌悪感をあらわにした。

・ボロボロなメガネウラが空中高くにやはり、一瞬だけ止まったところを見てフィリップはニヤリとする。

『読みは当たった、メガネウラは古代最大級の肉食性の昆虫で知られてる…しかし意外と知られてないが、メガネウラにはある弱点がある。』

『…なんだって!?!』

・フィリップの言葉に翔太郎とメガネウラが驚いた。

『それは、ホバリングが出来ないこと…つまり長く空に留まらない

「ことさ！セヤアッ！」

『ぐぼうああっ！！！』

- 説明しながら慣れた手つきでまたまたメガネウラを引っ叩く。

- メガネウラの羽根のつくりは現代に棲息しているトンボとは根本的に違い、現代トンボや鳥の様にホバリングに全く向かない様になっており…故に長い間空に留まらず、普段は滑空する形で飛行を行っているのだ。

『だからほんの一瞬しか止まれない…しかし代わりにそれが素早い攻撃と飛行に繋がる様になってるから堪ったもんじゃないね。』

『クソがー！！』

- 余裕たっぷり悠長に語るWを見て、メガネウラは口汚く悪態をつく。

『悪党の声は聞こえないな…。』

『同感だぜ。』

「METAL！」

「LUNA/METAL！MAXMAM-DRIVE！！」

- Wは聞く耳も持たずにすぐさま必殺技の体勢に入った。

『『メタルイリユージョンッ！！』』

『や…やめて！止めて！やめて！止め…ぴゅー…ッ！…！』

・いくつもの光輪をメタルシャフトから発生、それらを撃ち出してメガネウラに全弾命中させ、大爆発が起こる…Wの派生フォームのうちの一つ、ルナメタルの必殺技『メタルイリユージョン』が見事に決まったのだ。

『おい、左！フィリップ！終わったか？』

「ほっほーい、二人共〜。」

『よ！そっちもか？まあ対したこと…。』

・ここでアクセルとしんのすけが駆けつけてきた、余裕こく翔太郎だが…。

『…違う！まだだ…うわ！？』

『どわあああ！？』

『左！？』

「フィリップお兄さん！」

・フィリップが何かを伝えたかったがもう遅い…Wの足元に針が飛んできて爆発が起きた。

『ギシエアアアアアッ！…！』

「おわああ！？でつかいトンボだゾッ！！」

『なんてことだ…暴走しているのか！？』

・爆風が晴れると同時に巨大なトンボ、否、巨大化したメガネウラ・ドーパント…ジャイアントメガネウラが姿を現わした。

・ガイアメモリの種類によってはドーパントを巨大化・暴走させてしまう能力も備わっており…例としてはWが以前戦った古代エビ・アノマロカリスに似たアノマロカリス・ドーパントや、アクセルと激突したトリケラトプス型のトライセラトプス・ドーパントなどがある。

・どうやらメガネウラもその類の力を持つメモリらしい…。

『この！』

『手を貸すぞ、二人共！リヤアツ！！』

「ENGINE！JET！」

『グキヤキヤキヤ！！』

・Wがメタルシャフトで叩いたり、アクセルがエンジンブレードから紅い矢を放つも、全く効いてないのか、ジャイアントメガネウラは嘲笑う様な声を上げた。

『効いてないだと…パワー不足ってことか！？』

『シギエエエエー！！』

『なんて奴だ…うおおお！？』

『照井竜！？』

- Gメガネウラの爆発する針がアクセルを襲う、だが間一髪真横に転がり、上手く回避。

『今は危なかったぞ…！』

『驚かすなよ、照井！！』

- Wはヒヤヒヤしつつも、アクセルを心配した。

『あんなデカトンボをどうしろと？』

『さて、どうしようか…。』

『ふむ…少々マズいね…。』

- Wとアクセルがあーだこーだ言い合っていると、そこでしんのすけが…。

「オラにお任せだゾッ！」

『何言ってるんだ！？おい！しんのすけ！！』

『Y A M E R O！！』

- アクセルと翔太郎は止めようとしたが、しんのすけはおもむろに

ズボンを下げ…。

「大回転けつだけ星人！！ぶりぶり～！ぶりぶり～！」

『『ズコー…ッ！！』』

- けつだけ星人しながらその場に円を描く様にグルグル回るしんのすけを見てWとアクセルは盛大にズツこけた。

『『アホかアアアアアッ！！』』

- 即座に大絶叫、しかし。

『アガガガ…！！』

『『ズコー…ッ！！』』

- Gメガネウラは回ってるしんのすけを見て、クラクラと眼を回し始めたという…そしてWとアクセルは再び盛大にズツこけた。

『そうか！要は巨大なだけでトンボと大差ないわけだから、普通のトンボ同様、眼を回しやすいのまで同じだったらしい…それを見越してのあの行動、すごいな！しんのすけ君は！ゾクゾクするよ！！』

『あー…大丈夫か？フィリップ…』

- まさかのしんのすけの大活躍を見てフィリップは色々と暴走を始めた。

「いや～それほどでも」。

『いや、褒めとらんぞ…。』

- 照れるしんのすけにアクセルがビシッとツッコんだ。

『反撃のチャンスだぜ！この隙にアイツを…。』

『待ちたまえ…もうじき…来たね。』

『ギヤオオオオオン！！』

- 翔太郎を制止し、フィリップがそう言うと同時に突如、小さいメカニカルな白い恐竜…否、『牙の記憶』を宿したフアングメモリがフィリップの身体を担ぎながら乱入してきたのだ。

『そうか！フアングのパワーなら…って…。』

『な…なんじゃこりやあああ！！』

「フィリップお兄さんがナマコみたいな色だゾッ。」

『…忘れてた。』

- フィリップの身体を見て、翔太郎は絶句、アクセルは某殉職刑事のセリフを叫び、しんのすけはストレートに言ってしまった。

- フィリップの身体は何故か全身『紫色』だった。

- 翔太郎とフィリップが温泉でWに変身した際、フィリップの身体はあの『毒の沼』に沈んだまま放置された、それが災いして浸かつ

てる内に全身不気味な紫色に染まってしまったのだ。

『しかし、特に支障は無いから安心したまえ。』

「FANG！」

『お前が良くてもオレが良くないって！！あーもー…ヤケだ！どーにでもしろ！！』

「JOKER！」

・フィリップはさほど気にしてないが相棒として翔太郎はそうはいかない、Wの中で言い合いをしながらファングをメモリ形態に変形させて右スロットに、メタルメモリを外してジョーカーメモリを左スロットに装填。

「FANG/JOKER！！」

・ハーフチェンジをした途端、Wの変身が解けて翔太郎が気を失い、代わりにフィリップがWに変身と同時に立ち上がる。

・右半身が白いファング、左半身が黒いジョーカーと化した上、全身が野獣を彷彿とさせる刺々しいフォルムになり、赤い両眼の眼つきも険しくなり…Wファングジョーカーへと変貌した。

「フィリップお兄さんがアクション仮面になったゾ？」

・尚、ファングジョーカーになった際は身体の主導権は自動的に翔太郎からフィリップに移るのだ。

『しんのすけ君、協力感謝するよ…あとは仮面ライダー（ヒーロー）に任せてくれたまえ…ハアアアアアアッ！！』

「ARM - FANG!!」

『ギギヤアアアア!?!』

- Wがそう言うのと、ファングメモリの角を指で弾き、腕にアームセイバーと呼ばれる刃を生やし、Gメガネウラの顔面をメッタ斬り、さらに。

「SHOULDER - FANG!」

『セイヤアッ!』

『グギエツ!!』

- 続いてまた角を弾き、肩に生やした刃・ショルダーセイバーをブーメランの様に投げ、Gメガネウラの巨体を斬り刻む。

『トドメだ、翔太郎、照井竜、ここは合わせよう。』

『OK。』

「FANG!」

「FANG / JOKER! MAXIMUM - DRIVE!!」

『フツ…誰に言ってる? お前らこそしくじるなよ。』

「ACCEL! MAXIMUM - DRIVE!!」

- Wは三回目を弾き脚から刃・マキシмумセイバーを生やし、アクセルは必殺技の体勢を取る。

『『フングストライザー!!』』

『オラアアアアアッ!!』

『ギイイイイイイイイイイイイイイイイ!!?』

- Wから放たれた斬撃波を飛ばすキック・フングストライザー、アクセルから放たれたバイクのタイヤ痕の様な軌跡を描くキック・アクセルグランツァーが同じタイミングでGメガネウラに炸裂、恐竜に似たオーラと『F』の字が浮かび上がると同時に爆散し、ドーパントだった男と砕けたメガネウラメモリだけが残る。

『今度こそやったようだね。』

『やれやれ…後は被害者達を解放するだけだな。』

- Wとアクセルは変身を解いて、捕われた人々を救助…。

「ギャアアア! フィリップ君! 翔太郎君!」

「お…お前ら…頭は確かか…!!?」

「「?」」

- 突然亜樹子が顔を赤くして絶叫、照井は可哀相な人を見るような

目つきで二人を見る…。

・何故なら。

「なんで服着てないの!？」

「…え?」

・そう、温泉で変身したため、二人は全裸なのだ…しかもタオルを巻いてたはずなのに何故か消滅しており、二人のいでたちはどう見ても裸族だった。

「うがああああ!?!なんでだー!!」

「そんなドジョウみたいなのをいつまでも見せるんじゃない!猥褻物陳列罪で逮捕するぞキサマらッ!？」

「ドジョウ!？」

「オラの父ちゃんのマンモスよりも小さいゾ…。」

「ならば僕はアナゴさんだね。」

「どーでもいいから早く服を着ろアンタ達ッ!!」

・照井にサイズを指摘されてショックを受ける翔太郎、某タラコ唇の超絶渋いボイスなサラリーマンをサイズにしてしんのすけと会話するフィリップ、いつまでも赤い亜樹子だった。

「仕方ない…これを使え。」

「隠せてか？面積足りなさ過ぎるぞ！！」

・照井が二人に手渡したのは葉っぱ二枚だった、翔太郎はブチ切れた。

「ありがとう、照井竜。」

「付けるなアアアアアッ！！」

・全身紫色で葉っぱ一枚のフィリップ…もう、何人？この人？

・ちなみにフィリップによってドーパントだった人身売買の犯人二人は顔をボコボコに殴られ、全裸で逆さ吊りにされてしまい放置…後日さいたま県警に発見・逮捕され、風都署に身柄を引き渡されたという。

・こうして一連の事件は全て解決、全員無事に戻れた。

・翌日。

「じゃ…オレ達はこれで。」

・そう、別れの時が来たのだ。

「行っちゃうの？フィリップお兄さん達…。」

「今度は風都に遊びに行くといいよ、しんのすけ君。」

「母ちゃんおケチだから行けないかも。」

「翔太郎！亜樹ちゃん！照井竜！？」

「父ちゃん！母ちゃん！？ああ… ななこおねいさんに忍さん…。」

「たーやー？」

・絶叫、そしてフィリップとしんのすけ・ひまわり以外全員気絶した。

・風都に帰ったフィリップ達…翔太郎と亜樹子は『ゴリラが来る！』『幽霊がこつち見てる！』などと一部違う意味でうなされながら寝込み、照井に至っては有給使って三日間寝込んだ…ちなみにフィリップは健康そのものだ、しつこいようだが全身はまだ紫色だった…。

・野原家ではひろしも有給で休み、みさえもガタガタと震えながら寝込んだという。

「全くだらしないな…。」

「全くだらしないゾ！もー！」

・風都とさいたま…違う場所にいたはずの二人が、全く同じ時間、同じタイミングで似たようなセリフを呟きながら本を閉じる。

・この本は二人が旅館で作った新作のぶりぶりざえもんだった…。

・表紙に描かれてたぶりぶりざえもんの隣には緑と黒の身体の『もう一人の救いヒーロー』がポーズしている絵が描かれていた…ちなみに描いたのはフィリップ…キメセリフはもちろん。

『さあ、お前の罪を数えろ!!』
』

後編 - 嵐を呼ぶC / Finish? - (後書き)

後編… 買い替えた新携帯を操作しつつ完成、なかなか慣れません

今回もキャラ崩壊激しくなりましたが、個人的にフィリップと照井は動かしてて楽しいですね… 葉っぱやお婆さんとかやらかしましたが
(苦笑)

長くなったり、最後あたりがグダグダになりましたがファンゲストライザーとアクセルグランツァー発動のシーンはお気に入りです、Wikiによると照井はアクセルグランツァーよりもエンジンブレードの技を多様するそうです… カッコイイ技なのに少し残念です

最後の絵本でWとぶりぶりざえもん、まさかのコラボ、Wの『A編』でお絵描きされてたWを思い出して急遽入れてみましたがいかがなものでしょうか…?

最後まで読んで下さった皆様、本当にありがとうございました、それではまたどこかでお会い致しましょう！柳雨でした！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9432k/>

嵐を呼ぶC/W & Action

2010年10月14日14時08分発行